

2024年7月14日(日) 聖霊降臨後第8主日
銀座教会 主日礼拝(家庭礼拝)

礼拝招詞

「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。」

ヨハネによる福音書4章23節

主の祈り

交読詩編 詩編96編7～10節

諸国の民よ、こぞって主に帰せよ

栄光と力を主に帰せよ。

皆の栄光を主に帰せよ。

供え物を携えて神の庭に入り

聖なる輝きに満ちる主にひれ伏せ。

全地よ、御前におののけ。

国々にふれて言え、主こそ王と。

世界は固く据えられ、決して揺らぐことがない。

主は諸国の民を公平に裁かれる。

使徒信条

讚美歌 179番(よろこびあふるる)

聖書 マタイによる福音書 9章18節～26節

18 イエスがこのようなことを話しておられると、ある指導者がそばに来て、ひれ伏して言った。「わたしの娘がたっただいま死にました。でも、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、生き返るでしょう。」19 そこで、イエスは立ち上がり、彼について行かれた。弟子たちも一緒だった。20 すると、そこへ十二年間も患って出血が続いている女が近寄って来て、後ろからイエスの服の房に触れた。21「この方の服に触れさえすれば治してもらえる」と思ったからである。22 イエスは振り向いて、彼女を見ながら言われた。「娘よ、元気になりなさい。あなたの信仰があなたを救った。」そのとき、彼女は治った。23 イエスは指導者の家に行き、笛を吹く者たちや騒いでいる群衆を御覧になって、24 言われた。「あちらへ行きなさい。少女は死んだのではない。眠っているのだ。」人々はイエスをあざ笑った。25 群衆を外に出すと、イエスは家の中に入り、少女の手をお取りになった。すると、少女は起き上がった。26 このうわさはその地方一帯に広まった。

牧会祈禱

天の父なる神様。今日もわたしたちは、あなたの御前に礼拝をささげます。礼拝する場所は違いますが、主イエス・キリストの霊によって一つとされて、わたしたちはあなたの肢とされております。御言葉を通して私たちに祝福し、聖霊で満たしてください。銀座教会に連なる全ての兄弟姉妹を祝福してください。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

「イエスがこのようなことを話しておられると」何を話しておられたのでしょうか。それは、このすぐ前にあります、断食についての問答の中の言葉であります。そこでは、「新しいぶどう酒は新しい革袋に入れるものだ」と語っておられます。ごく簡単に申しますと、新しい時代、神の国が来ている。福音の喜びがここに来ている。その新しい喜びを祝うために、私たちの心を新しくしようではないか、新しい心で迎えようではないか。そのように語りかけていたちょうどその時のことです。ここで、苦しむ人々が主イエスの話をさえぎるのです。この物語には二人の、苦しむ人がおりました。一人目は、ある指導者とあります。この指導者が、主イエスの下に来て言いました。「わたしの娘がたったいま死にました。でも、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば生き返るでしょう。」深い悲しみの中におります。その意味で、主イエスが語られた喜びの世界からはまだ遠い人です。しかし彼は、主イエスが、自分の娘をよみがえらせてくれるかもしれない。絶望しつつも、一縷の望みをかけて主イエスの下に来たのです。主イエスはこの人の悲しみを、そしてそこにある死の力を打ち砕くために、死んだ娘のところに向かいます。

すると、そこに十二年間もの間、病気の苦しみの中にいた女性が、主イエスの服の房に触れます。この女性の病気は、婦人病。不正出血でありました。これは、現代では治る病気でありますけれども、この当時はなかなか完治は難しい病気であった。しかも、律法では、この病気に罹った人は汚れた者とみなされていましたから、人前には出られません。心身の苦しみに加えて、社会的にも隅に追いやられるという、絶望的な状況の女性だったので。この女性の心にも、深い悲しみの闇がありました。マルコによる福音書では、この病気を治すために多くの医者にかかって、ひどく苦しめられて、しかも全財産を使い果たしたのにもかかわらず、ますます悪くなるだけであったとあります。それが十二年間という長い月日で起こった出来事です。それは彼女の人生の半分ほどの長い月日であったようです。どれほど辛く苦しい日々であったことでしょうか。この女性は、最後の望みをかけて、後ろから主イエスの服の房に触れます。「この方の服に触れさえすれば治してもらえる」と思った、とあります。何も言わずに、そっと触れたのはなぜかという、律法で汚れているとみなされている彼女は、人前にも出られない。ましてや指導者や学者といったような人の服に触るなんてとんでもないことだったからです。もしもばれたら、とがめられるに違いないのです。だから群衆に紛れてばれないようにそっと触れたのです。しかし主イエスはこの女性の悲しみ、苦しみを一瞬で見抜き、そしてそこで彼女が最後の望みをかけて、後ろから主イエスの服の房に触れたことを悟られたのです。

主イエスは振り向いて彼女をはっきりと見つめて、そして言われます。「娘よ、元気になりなさい。あなたの信仰があなたを救った。」その時に、十二年間もの間彼女を苦しめていた婦人病は確かに癒されたのです。

この女性の信仰について少し考えたいのです。この女性の信仰は批判的に見ることもできるのです。服の房に触れさえすれば癒される。これは御利益宗教的な信仰です。こんな信仰を信仰と呼んでもよいのか、とも言えます。少なくとも未熟な信仰です。しかしそれを主イエスは、認めてくださったのです。「あなたの信仰」と呼んで、振り返ってくださり、そして癒してくださったのです。

このとき十二年間の間苦しめていた彼女の病が癒され、その苦しみの全てが報われました。彼女は病気が癒されただけでなく、その魂が救われて、主のものとなりました。主イエスの娘とされたのです。

ここに奇跡の出来事が起こっております。この箇所だけでなく、聖書には、多くの奇跡の記事が語られております。この聖書の奇跡の出来事に躓く人は案外少ないと聞きます。皆さんも、信仰を告白したいと願ったとき、このような聖書の記事を、案外と素直に信じて物語を聞いていた人の方が多いのではないのでしょうか。イエスは全能の神なのだから、このような奇跡を起こすことはできるに違いないと。しかし同時に私たちはこのようにも思っているのではないのでしょうか。このような奇跡の出来事が、信じたからと言って必ず起こるわけではないのだと。そんなふう、どこかで冷めた心で、少し距離を置いてこのような物語を聞いていることがあるかもしれません。逆に、このような出来事が今でも現実に起こると真剣に信じる人々もおります。聖霊の働きを重んじる教派には、聖霊による癒しを強調する人々。牧師が手をかざして、病気の人を癒せると言う、そういう教会もあります。必ずしもそれらが間違っているとは言えません。実際に、祈りの中で、聖霊が豊かに働いてくださり、奇跡的に、重い病気が治るということは現代でも起こります。医者がさじを投げた人が、神様の奇跡として言えないような恵みで癒されるという証しは、今でも聞くのです。しかしそれでも、そういう癒しを強調するところ

に伴う危険はあると思うのです。そこでは祈りがいわば魔術的に扱われます。人間が主体となって聖霊をコントロールする、人間が教祖化してしまうのです。癒しの方だけでなく悪魔祓いなどをする牧師さえ出てきます。しかしそれらは決して正しい信仰とは言えません。大切なことは、この物語に、どのように慰めが語られているか。神の慰めがわたしたちにどのように語りかけられているかを見抜くことです。私たちもまた、病気になります。その時、主に癒しを願ってもよいのです。しかしそこで一生懸命に祈って、それでも癒されないとき、わたしたちはどうすればよいのでしょうか。信仰が弱いからだ、と嘆くべきでしょうか。神が祝福してくださらないとつぶやくしかないのでしょうか。そうではないと思うのです。あるいは、たとえその時、癒されて感謝していても、またいつか、病気になって死んだらどうなるのでしょうか。もし、そこで信仰が揺らぐのならば、わたしたちの信仰の姿勢がどこかで間違っていたということではないのでしょうか。わたしたちの信仰は、病の癒しのあるなしにかかっているわけではありません。ではなぜ、聖書はこれほどに、主イエスのなされた癒しの奇跡。また死人のよみがえりという奇跡を語っているのでしょうか。

この物語に語られます、よみがえった少女も、12年間病気で苦しんでいた女性も、癒されたけれどもまたいつか年を取り、病気になって死んだに違いないのです。なのに、なぜ主イエスはここで病気を癒されたのか。このあとに続くマタイによる福音書の11章での主イエスの御言葉を紹介したいと思います。洗礼者ヨハネが、牢屋の中から、その弟子を遣わして尋ねさせます。「来たるべき方はあなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」その問いに対して主イエスは答えます。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである。」主イエス御自身がここで宣言しておられます。わたしこそが来たるべき救い主だ。神の国が確かに来た。私を通してこの闇の世界に、光が来たのだ。神の国が到来したのだ、と。

主イエスは単に奇跡を起こすためだけに来られたわけではありません。一つ一つの奇跡よりも、はるかに大きなことがあります。それは、死からの復活であります。主イエスは死人をよみがえらされただけではありません。そのような出来事は確かにあったと私は信じます。しかし、それは根本的な救いではありません。わたしたちは病気を癒されても、いつか必ず死にます。そして死をもってわたしたちの地上の命は終わります。聖書はわたしたちに告げております。わたしたちがどのような死を迎えるにせよ、わたしたちは罪人であり、その罪の結果として死ぬのだと。なぜなら、罪とは神との命の断絶であるからです。それは創世記の初めに語られております。そこに記されるのは単なる神話ではなく、わたしたちの命の意味が語られております。聖書が語る救いとは、罪からの救いです。そしてそれはすなわち、命の源である、神との関係の回復を意味しております。私たち人間は神の御前に皆罪人であると聖書は告げております。聖書は、病気を罪のモデルとして描いております。罪は病気のようなものであり、神はそれを、主イエスの十字架によって癒されました。イザヤ書の53章にはこのように語られております。「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。彼が担ったのはわたしたちの病 彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに わたしたちは思っていた 神の手にかかり、打たれたから 彼は苦しんでいるのだ、と。彼が刺し貫かれたのはわたしたちの背きのためであり 彼が打ち砕かれたのは わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによってわたしたちに平和が与えられ 彼の受けた傷によってわたしたちはいやされた。」

(53章3-5節) 主イエスは十字架にかけられ、死なれました。罪をもたない方が、わたしたち人間の罪を背負い、死んで、のちによみがえることによって、死の棘を取り除かれたのです。死の力を打ち砕かれたのです。死を乗り越える命。それが主イエスの復活であります。この、復活の命をわたしたちは信じます。主イエスの復活を信じる私たちは、死の先にも、命があることが見えるのです。病気の時にも、復活の主イエスが私たちと共におられるということがわかるのです。そのことを信じられるとき、私たちもその心に、神の喜びがもうすでに来ているのです。命の主との関係が回復しているからであります。わたしたちの病は癒されました。主イエスの十字架の御血潮が、そこで受けた主の御傷が、わたしたちを確かに癒すのです。主イエスの傷は、私たちの罪のためであり、主イエスの御血潮はわたしたちの罪を洗い流すからであります。主イエスによって、私たちと神との間には確かな平和が与えられています。だからわたしたちもまた、この女性に言われた言葉を喜びをもって聞くのです。「娘たちよ、息子たちよ、元気になりなさい。あなたの信仰があなたを救った」と。主イエスは、私たちの命の回復の道を切り開いてくださったのです。

主イエスは、この女性を癒したのち、すでに死んでしまっている十二歳の少女のいる家に向かいます。少女の父親である、指導者についていくのです。そこにはすでに、笛を吹く者。騒いでいる群衆がいました。人が死んだときには葬儀が行われました。そのとき葬儀のために雇われた人たちがいたのです。笛を吹く者。泣き女といった人々がいた。彼らが笛を吹いたり泣いたりして、そこには、この少女が死んでしまったというどうしようもない悲しみが、その場を包んでいました。そのような中で主イエスが言われます。「あちらへ行きなさい。少女は死んだのではない。眠っているのだ。」嘲笑いが聞こえました。この嘲笑いを、その場にいたならばわたしたちもきつとしたに違いないのです。そうではないでしょうか。死という現実を覆すなどできるわけがない。この男は何を言っているのかと。しかし主イエスは命の主であります。この命の主からすれば、どんな死であっても、眠りと同じなのです。主イエスは嘲笑う人々を追い出し、そして娘をよみがえらせました。ここにも、主イエスの救い主としてのたしかなしるしが行われました。主イエスコそが、命の主である。死の力を打ち破って、少女をよみがえらせてくださった。この救い主が、私たちの人生にも、わたしたち一人一人の内にも来てくださっているのです。今ここに来てくださっているのです。私たちも、日々、その体は老いていきます。そしていつの日か死を迎えるでしょう。今、何かの病気と闘っておられる人もおられるでしょう。痛みと闘う人々。苦しみを耐え忍んでいる人もおられると思います。そこでわたしたちは、癒してくださいと主に心から願ってもよいのです。しかし、そこで癒されようと、癒されまいと、主イエスは今もわたしたちと共に生きてくださっているのです。主はわたしたちの苦しみの場に共に居てくださいます。私たちの終わりの日にも、臨終の日にも、共におられるのです。主イエスが、わたしたちと同じ人間として生きてくださり、十字架の死に直面してくださった。闘ってくださいました。十字架で、死と闘い、そして勝利してくださったのです。その主イエスと一つとされたのです。だから、わたしたちの死は、それがどのような死であろうと、復活の主イエスと共なる死なのであります。わたしたちの病気は主イエスの癒しの下にある病気なのです。そうであるならば、この命の主の下で、病気の日にも、死に際してもなお、主イエスを喜び、仰いでいきたいのです。主イエスは、今日も私たちと共に生きてくださっています。わたしたちが主イエスの後姿を見つめていくだけでなく、主イエスは、わたしたちの行くところ、必ずついて来てくださる方でもある。主は私たちの不信仰や未熟な信仰にもかかわらず、振り返ってくださいます。主イエスが日々、わたしたちに振り返ってくださること。それは癒しそのものよりも大きな恵みであります。私の人生が死で終わるのではなく、死が単なる扉に過ぎなくなるからです。何の扉であるか。永遠の命の扉です。死を突き抜けて、私たちのために救いの道を、命の道を拓いてくださった主イエスとの出会いがあるところ。そこではもう、死は力を持たないのです。そしてこの礼拝の中に、主イエスとの出会いがあります。皆さん一人一人の内に、主は今日も語りかけてくださる。娘よ。息子よ。あなたの信仰があなたを救った、と。ここにおられる皆さん一人一人に、今日も主は語りかけてくださるのです。その恵みにおいて、共に感謝をもって今日という日を歩んでいきましょう。主イエスがもたらしてくださった救いの喜びを共に分かち合いたいのです。神の御国が皆さんの心にも確かに来ていることを信仰において、受け止めていきたいのです。お祈りをいたします。

主イエス・キリストの父なる神様。今日も私たちの生活を振り返ってください。そうすれば、私たちの人生は報われます。主よ、どうか、わたしたちの行くところ、いつも伴ってください。わたしたちがこれから歩むところ。そのすべてにおいてその行く手に立ってください。わたしたちの死の間際にも、あなたの臨在を知らせてください。そうすればわたしたちは何も恐れることはありません。あなたが共に生きてくださること。あなたと共にあること。それ以上に素晴らしい喜びはないからです。わたしたちが、主を求め、主を信頼し、主に従う歩みが、この世において、神の国の到来を告げる歩みとなりますように。私たちを祝福し地の塩、世の光としてくださいますように。この祈りを主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

讚美歌 140 (いのちのいのちに)

献 金

頌 栄 544番

祝 禱 仰ぎこいねがわくば 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共に とこしえに豊かにあるように。アーメン